

美容医療に携わる看護師の倫理観

Ethics of nurses engaged in aesthetic medicine

田中 樹¹

Itsuki TANAKA

キーワード：美容医療、看護師、倫理観

Key words : aesthetic medicine, nurse, Ethics

昨今、雑誌やインターネット、マスメディアにおいて美容医療サービスに関する広告を目にする。従来、美容医療は美容整形を中心に行われてきたが、昨今では、対象部位も術式も多様化されており、「プチ整形」と呼ばれる注射や糸で気軽にできる美容整形の需要も増加している¹。このような背景には、SNSなどの情報社会となり、写真や動画で自己アピールをする機会が増えたことや、美の概念に関する多くの情報が可視化され、コンプレックスが揺さぶられ、美容医療の需要が増加してきたことも関連していると考えられる。

美容医療サービスの特殊性は、美容医療が通常の医療と同様に身体への侵襲を伴うにも関わらず①緊急性がないこと②医学的必要性（適応性）がないこと③施術が患者の主観的願望を満足させるものであることから、ほとんどの美容医療が自由診療のため健康保険が使用できず治療費が高額になることが挙げられる²。一般の医療で一定の危険を伴う診療行為が許されているのは、患者の救命や健康維持・回復という利益が認められているからであり、それに比べ美容医療の利益は、身体の審美性向上や精神的満足度であり、そのことから保険適応外となっていると考えられる。

このように、美容医療を受ける患者は、生死に関わる危険な状態ではないにもかかわらず大きな変化を期待し高額な治療費を支払い、身体侵襲を受けている。そのため、美容医療サービスを受ける患者と関わる看護師には、さまざまな倫理観が問われることが予測される。それは、看護師という職業人として関わっている以上、避けられないことなのではないだろうか。

これまで美容整形は、「劣等感克服のため」または「異性に対するアピールのため」として報告されてきたが、近年の調査では「自己満足」や「自分の心地よ

さ」のために整形を行う人が増加してきていることが明らかになっている³。つまり、美容医療を受ける患者は、「理想的な自分」という価値観を基とし、他者との比較や関係性ではなく、自分自身のために整形を行っている。

心理学者アブラハム・マズローは「生理的欲求」「安全欲求」「社会的欲求」「承認欲求」「自己実現欲求」と、1つ下の欲求が満たされると次の欲求を満たそうとする基本的な心理的行動を表す「欲求5段階説」を唱え⁴、5段階のうち「承認欲求」と「自己実現欲求」は高次の欲求であると述べている。わたしは、美容医療を受ける患者は高次欲求の段階にあると感じており、患者と医療者の価値観を統一させることは非常に困難であるとも感じている。

医療現場では、疾病のある患者に対し、どのような治療方針を進めていくのか、予測が容易である。そして、治療のゴール設定に関してもある程度患者と意思統一ができる。それは、根底に生死が関わっているからこそであり、生きるための治療であることが多いからである。しかし、美容医療の現場では、患者の期待する状態にはさまざまな価値観が混在している。個人の理想の美は、その人の主観であり、他の人がその価値観を客観的に正しく理解することは困難であるといえる。看護師として関わる上で、患者の要望に「今の状態で何の問題があるのか。」と感じることも少なくはないのではないだろうか。そのため、患者とゴールを共有できる美的センスや、様々な価値観を聞き入れられる柔軟性を持って関わる必要があり、患者の尊厳や価値観を大事に関わるという点においては、医療者として通常医療と変わらない倫理観であるといえる。

また、そこには医療者としての知識と技術も必要で

1 帝京科学大学 Teikyo University of Science

ある。しかし、美容医療については、看護師の教育課程において触れられていない現状にある。そのため、美容医療に携わる看護師は、独学で学習し続けなければならない。美容医療における看護技術に関しては、手術の補助という大きなものから注射やレーザー治療という細かな部分も関連する。注射一つにせよ美容医療での内出血は、クレームや訴訟となることさえあり、それは、美に関しての価値観が高い患者だからこそ失敗が許されないということでもある。美容医療の範囲がエステティックサービスと異なる点は、人体に対する危険があるか否かが判断基準となっている。エステティックサービスの多くは、人体に対する危険がないため医療行為には当たらず、医師免許がなくても実施することができる⁵とされている。そのため、看護師の行う医療行為は、人体に対する危険を含んでいることを忘れてはならず、患者が納得した治療を受けられるように自己研鑽していく必要がある。そして、美容医療に関する知識も重要であり、患者が望む状態へ近づけるための治療として効果と副作用などをきちんと説明し、適切な治療へと導くことが重要である。美容医療の現場では、医師ではない企業家が経営する美容外科もあり、医療倫理に欠ける行為があることも問題視されている⁵。それは、自由診療であるため、利益を追求するあまり、必要のない治療を勧めるという問題である。しかし、そのような環境にあってもそこに携わる者は、医療者としての倫理観を持ち、患者にとって本当に必要な治療なのかを見極めていく必要が

あるといえる。

このように、美容医療に携わる看護師は、目まぐるしく変化する美容業界での知識や技術、また安全面への配慮、多様化する価値観に対する柔軟な対応など特殊性の高い看護を提供する必要がある。医療行為としては、通常医療の看護師と何ら変わりのない技術かもしれない。しかし、患者の自己実現を助けるための価値観に合わせた看護がどれほど行えるかは、看護師一人ひとりの職業人としての倫理観にかかっているといえる。

文 献

1. 鈴木公啓. 美容医療 (美容整形およびプチ整形) に対する態度—経験の有無や興味の種類による比較. 東京未来大学研究紀要. 2017; 12: 119-129.
2. 岡田希世子. 美容医療契約の特性. 経営学論集. 2016; 26(3): 51-61.
3. 谷本菜穂. 美容整形というコミュニケーション—外見に関わり合う女性同士. フォーラム現代社会学. 2017; 16: 3-13.
4. A. H. マズロー／小口忠彦. 人間性の心理学—モチベーションとパーソナリティ. 改定新版. 東京: 産業能率大学出版部; 1987.
5. 高瀧英弘. 美容医療サービスの法的特徴と問題点. 国民生活. 2017; 3: 4-8.